
箱庭の遊び方

麦頭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

箱庭の遊び方

【Nコード】

N1736N

【作者名】

麦頭

【あらすじ】

参加資格は『あり得ない世界、夢、能力を妄想したことがある人』
優勝賞品は『世界を書き換えられる力』
なんと胡散臭い戦いが僕らの町で始まった。
昔考えていたトンデモ設定が現実になったらどうしますか？これは、そんな妄想と妄想のぶつかり合う、そんな話。

始まる前の、誰かの戯言（前書き）

初めて小説というものを書きます。

拙いところばかりというか、拙いところしかないとは思いますが、読んでいただけたら幸いです。

少しでも皆様の時間を楽しみを提供できることを祈って。

始まる前の、誰かの戯言

——自分が物語の主人公であるという夢を描いたことがあるだろうか。

ちなみに俺は、ある。

しかもわりかし本気でだ。

というかきつとそれは誰にでも一度はあるのではなかだろうか。
小学校の時、気合を入れたら手から何か出ると思って『修行』した男の子は何人もいるだろうし、幼稚園の時にお姫様になりたいという夢を持っていた女の子たちも、言ってしまうえばお姫様が出てくる物語を読んだり聞いたりして、だからこそ『なりたい』と思うんだろう。

ただ、現実はどこまでも厳しく、俺らはあるときに気付く。

どんなに頑張ったって手から気なんか出ないし思いつきりパンチをしても伸びたりなんかしない。

お姫様にはなれないし、ガラの悪い男に絡まれたって、都合良かつこいい男の子（女の子でも可）なんかが助けくれたりなんかし

ない。

現実はどこまでも現実で。夢想したことは結局どこまでいっても空想で。

そんなに都合よく物語の登場人物にはなれないことが否応なしに突きつけられて。

現実生きていくことの辛さを押し付けられて。それを乗り越える面白さを見つけたりして。

でも残念なことに俺は気付くことができなかった。

気付くことを恐れた。

中学校時代の暴走がそのまま続いた。

もう一度聞こう。

自分が物語の主人公であるという夢想を描いたことがあるだろうか。

そしてさらにもう一つ聞きたい。

いまだに自分が主人公だと信じているだろうか。

——俺は信じている。

お前たちも信じてるなら、俺と遊ぼう！！

今から始まるのはそんな大人になれない馬鹿どものくだらない妄想遊びのくだらない殴り合い。

遊び場は俺が作る。

ルールはいくつかあるが、大原則は一つだけ。

『妄想で、妄想を屈服させる』

さあ、俺の箱庭で、夢をかなえようじゃないか！！！

始まる前の、誰かの戯言（後書き）

誤字脱字、感想お待ちしております。

一話：始まりの前日

『あなたの夢をかなえましょう』

そんなことが一面にでっかく書かれたチラシが配られていた。

いや、配られていたというのはちよつと違つかもしれない。
突然空から大量に降ってきた。

僕らが住んでいるのはひと昔前で言うベッドタウンというところだ。
都市圏に近く、交通の便も悪くないので一気に開発された新興住宅地。

日本全国に多数ある何のひねりもない街である。

それなりにレベルの高い大学が近くにあるからか、子どもの割合が
他の場所に高く、小中高校も結構ある、というのが特徴だろうか。

その街の駅、中心部、ショッピングモールなどを中心にそのチラシ
は降ってきた。

その数一か所に千枚以上。

それが人の集まる場所に一気に降り注いだ。

しかも空を見上げててもそれを振りまいたであろうヘリコプターやら
飛行船やらは全く見えないのである。

その不思議さと新興宗教かともとれる一面の文字にちよつとしたニ
ユースになった。なぜかそのニユースに問題のチラシが映ることは
なかったのだが。

11
11
11
11
11
11
11
11
11
11
11
11

「で、これがそのチラシってわけですよ。」

学校からの帰り道、須藤がそんなことを言いながら、鞆から紙を取り出した。

「いや、突然『その』といわれても、何のことかわからな…なるほど。」

困惑しながら受け取ったチラシを一目見て、理解した。見たことはなかったがここ最近の学校での話題に上がらなかったことはない。

「よく手に入ったな。」

確か普段は腰の重い役所が驚くべき速さで一日で回収して、今は手に入れることも難しい、とか聞いたんだけど。

「うちの親父どの經由。」

須藤の父親は地方新聞社のデスク勤務だ。マスゴミやらなんやらいわれている職種の人だが、私は須藤の父親のことが嫌いではない。

豪快な人で、どこかしらイっちゃってる時もあるけど、まあなんだ
かんだ言って俺の師匠でもある人だ。

「ふうん、なるほど。あれ？でもこのチラシの写真とかは新聞に載
ってなかったよな。」

そう、この地方では結構なニュースになったこのチラシ。新聞社に
勤めている須藤の父親が手に入れたら新聞に載せないわけがないの
だ。

「もちろんそれにはわけがあるんだな。ま、その話は君の家に行っ
てからにしよう。」

「なんだ？また来るのかお前。最近うち来るの多すぎないか？」

「それはまあ君んち楽し。腹減ったし。ところで沙羅ちゃんはい
る？」

「いや。いないぞ。てかいいい加減諦めろ。俺はそろそろあいつの兄
貴として本気でお前と決着をつけなくてはいけない気がしてきた。」

「望むところだよん。どれだけ本気を見せてやるぞ？…だが今はそ
れよりもこのチラシだ。早く行くんだ友よ。」

「わかったよ。その前にコンビニに行こう」

「了解。」

そんなこんなで場所は俺の部屋に移る。

|| || || || || || || || || ||

少しここで俺らの説明をしよう。

俺の名前は黒峰 海里（くろみね かいり）。

それなりの進学校に通う高校二年生だ。

成績は中の上。運動の神経には自信がある。彼女はいない。今まで
もいなかった。畜生。

んで、俺の隣でカップラーメンを作っているのは須藤 渚（すどう
なぎさ）。

いわゆる悪友。俺の妹を狙っているらしい。以上。

あえて言うなら…馬鹿。うん。それ以外にないかもしれない。

いわゆる平々凡々、そこらじゅうにいるモブのような存在と
思っ
て
く
れ
て
い
い。

それは俺も同じなのだが。

というか、今気付いた。

「そのラーメンは俺の隠していた非常食だよな。」

「うん」

須藤はそれが何が？みたいな顔をしていた。

「ああ、俺のために作ってくれたのか。」

「うんにゃ、違う。情報量と思ってくれ。」

…そうか。それじゃ仕方がない。

「それに見合うだけのものはあると思ってるよん。とりあえずだ。まずなんで新聞に載せられないか、という話からだけど。」

「突然だな。」

「だらだら話しても仕方ないだろうよん。百聞は一見に如かず。写真を撮ってみればわかる。」

撮るものは何でもいいと須藤が言うので携帯のカメラを起動する。チラシを画面の中心に入れて、撮る。

…画像を見てみて驚いた。

「…真っ黒だな。」

「そ。隙間なく真っ黒。」

撮った画像に写っていたものは一面真っ黒な紙。これをチラシの写真といわれても信じられないだろう。

「どんな撮影機材を使ってもこうなるらしいよん。」

須藤の親父さんはいろんな撮影機材で試してみたらしい。しかしどんな撮影機材でも静止画、動画ともに取れなかったらしい。

なるほど、新聞に載らないわけだ。これを写真に載せてもどこぞのゴシップ記事にしかないだろう。

「ニュースにできないものはクズだって。」

で、ここにあるわけだ。なるほど。

あらためてチラシを見る。

表にでつかく『あなたの夢をかなえましょう』の文字。その下には『夢を信じているあなたたちに、五日後の朝四時、何かが起こる。』と小さな字で書いてあった。

裏を見てみたが、何も書いてない。

「え？これだけ？」

「いえす。何が起こるのかもどこが発行しているのかも何も書いてない。ただそれだけ。」

…なんだそりゃ。何のために配ったんだ？

「さあねえ。親父どのはなんかのイベントの話題作りかなんかじゃないのかと言っていたけど。」

「でもどこでやるのかとかは、全く書いてないと。」

「そ。ちなみにあぶり出しとか水につけてみたりとか色々やってみただけだなーんも浮き出てきませんでした。なにせ親父どのに百枚ほど渡されたからねえ。試せることは試しまくったよ。」

「なるほど。」

もう一度チラシを見る。二行しか書かれていないチラシ。

「…なんか、あれだな。」

「あれだね。」

そう、あれなのだ。このチラシからは。

「面白そうなおいがする。。」「」

須藤と言葉が被った。

なんだろう、何かが起こるようなよくわからない期待感。それをこのチラシは醸し出している。

「どうする?」「」

須藤が聞いてくる。

…どうするとは?

「五日後っていうのが配られてから五日後ということなら、明日の朝だよ。」

なるほど、お膳立ては整っているということか。

「決まっている。朝二時にお前んちの前で。」

「了解つ。」

改めてチラシを見る。

きっと、何かが始まる予感がした。

「さ、そうと決まったらゲームだゲーム。今日こそ真を落としちゃる！！さあ君もトップを狙え！！！！」

「どうでもいいが、お前ラーメンを忘れ「あにやあああつああああ！！！！」でろでろのふにゃふにゃの伸び伸びにiiiiiiii！！！！！！」

一話：始まりの前日（後書き）

…小説を書くのって難しい。

誤字脱字感想お待ちしております。

二話：始まりの合図（前書き）

プロットなんぞ何も立てず、勢いで書いています。

：駄目ですね。すでに矛盾が出てきている気がします。
前話を書き直すかもしれません。

二話：始まりの合図

二時の集合にしたのは一応の考えがある。

この得体のしれないチラシが配られているのはこの町だけらしい。つまり、何かあるとしたら、この街で起こるということだ。

なにかを起こすとしたら何かしらの用意が必要である。チラシを数千枚もまいたのだ。ちょっとしたイベントだとしても、それなりに用意が必要だろう。

そして、昨日の時点で何かイベントの舞台設営などが行われている様子はどこにもなかった。

だから、このチラシを配った『誰か』。その『誰か』達はきっと夜のうちに一気に用意をして、すぐに撤収する、という形で何かをするのではないかと思っていたのだが。

所詮高校生の浅知恵だったらしい。

「なんにもおかしいところなかったね。」

須藤が言った。

ジーパンにシャツ、そしてスカジャンという、なんとも田舎くさい恰好である。それが似合って見えるのだから、美形っていうものはいかんともしがたい。畜生。

ああ、そうだ、言い忘れていたがこいつは女だ。色気なんか感じたことはないけど。

割と整った顔をしているし、気さくな性格をしているせい、男女問わず人気がある。

男からは付き合いやすい友人として。女子からは恋愛対象として。普通逆なんじゃないかと思う。こいつのせいでうちの学校はカップル率が低いとの噂もある。許すまじ。

こいつの腕っ節は父親に鍛えられたせい、強い。特に剣術槍術薙刀などは、普通に全国大会で優勝できるんじゃないかと思っている。ちなみに一番好きな武器は木刀らしい。なぜか。うちの学校でのあだ名は『番長』ってことから察してくれ。

ふむ、そう考えるとこいつは主人公でもおかしくないスペックを持っているんだ。なのになんでかモブキャラ、というのがしっくりくる。俺といるからだろうか。いや違うな。色もののキャラだからだ。きつと。

「そうだなー。」

そう答える俺は、下はジーパン、上は黒のジャージ（おしゃれジャージではない）というどっからみても田舎の恰好である。いいじゃん。動きやすいんだし。

二時に集合した俺らは自転車で街の主要部分を一回りした。先ほども言ったと思うが、どこかしらでイベントの用意をしていると思っただの。しかしどこに行っても人が歩いてさえない。よくある違法駐車以外には怪しい車が止まってすらいない。

…一つだけ、止まっているのになんだか激しく揺れている車があったがさすがに中を見ることはできなかった。須藤と一緒にいたのが本気で悔やまれる。一人なら。せめて男友達と一緒にならめくるめく世界をのぞき見ることもできたのに！！！！！！

こほん。

つまりはおかしいところなど何もなかったということだ。いつも通りの夜。道路に大の字で寝ていても全く問題がないほど車の通らない田舎。みんなが寝静まった夜。河原に座った俺らを三日月だけが俺らを見て笑っていた。

「…今、恥ずかしいこと考えたでしょ。」

…昔からの付き合いはこういつとくに困る。わかってほしくないこともわかれてしまう。

「多分、『月が俺たちを見てる。まるでその徒労を笑っているかのようだ』てとこかな？」

しかもかなり鋭い。正確に見定めてくるのだ。

「そんなことよりも、そろそろ四時じゃないか？」

ナルシストー、ナルシストーと俺をつついていた須藤が時計を見る。

「ほんとだ、今三時五十五分。もうすぐだね。何が起るのかな？」

「さあ。でもまあ、せめて楽しいことが起こってくれと思う。」

ほんとにそう思う。

俺らがモブキャラなら、せめて巻き込んでほしい。

誰でもいいから転校生なんかやってきて、そしてそいつは何者かに追われているのだ。

うん、面白いなそれ。

何か影のある転校生。きつと美少女だ。外人だともっといい。
その子は友達になろうと声をかけた俺らを拒絶する。

『私に構わないで。』

しかしその瞳は悲しくうるんでいて、何かしら事情があることを
のぞかせる。

その瞳が気になった俺らはしかし何もできず、いつもの帰り道を
いつも通りに帰っている。

するとかすかに聞こえる女の子の悲鳴。声のした方向に走ってい
くと、そこにはあの転校生と、怪しい影！！

それに気付いた俺らは、多少覚えのある腕っ節を披露するため、
そいつと追跡者の前に立ちあはだかる。

そして決め台詞だ。

『ここは俺に任して先に行け！！』

「…それは死亡フラグだよ。」

なに！？須藤、貴様また心を読んだな？

「いや、後半声に出てたし。それより、時間。そろそろだよ。」

携帯を見る。三時五十九分。四時まで残り四十秒。

「本当だ。なにか起こりそうな予感はあるか？」

残り三十五秒。

「ない。町はいたって平和であります。隊長。」

残り三十秒。

「なんだ、チラシはただの悪戯か。」

残り二十五秒。

「いや、四時にならないとわからないし。期待を裏切られてもいいように予防線を張るのはカッコ悪いよ。」

残り二十秒。

「言ってる。俺はお前と違って繊細…ん？なんだ？」

残り十五秒。

「どうしたの？」

「いや、チラシを入れたポケットが熱い…」

そして。

そこからの十秒間を俺らは忘れることができないだろう。

俺がポケットから出したチラシはすでに持てないほど熱くなって
いた。

思わず投げ捨てる俺。

ひらひらと落ちていくチラシが一気に燃え上がる。

そこまでで五秒。

燃え上がったチラシがゆっくりと地面に落ちていく。
その炎が地面に着いたと思った瞬間。

「うわー!!」

「なんだ!!!？」

一気に広がり、炎に囲まれた円形の世界が生まれた。

そして時間は四時になる。

——レディイイイイイイス

エエエエエエエエエエエエ

エンド

ジェントルメエエエエエエエエエエエエツッン

——お待たせしましたッ!!!

今こそゲームの始まりですッ!!!!!!

そんな言葉とともに、
待ちに待った非日常が始まった。

二話：始まりの合図（後書き）

これを書いていたら、上司が後ろに立っていました。
血の気が引きました。

家に帰ってから書くことにします。

誤字脱字感想、お待ちしております。

三話・やるべきこと（前書き）

短い。

時間がないよー。

三話・やるべきこと

景色が一変していた。

見渡す限りを円形に立ち昇る炎が囲み、その中は俺の少ない語彙で表現するのならば一言ですむ。

『地獄』

俺が想像するソレそっくりの景色だった。
いや、煉獄というほうがしっくり来るのかもしれない。

そこは周りすべてが炎で炙られた『死んだ』世界だった。

頑丈な鉄筋の橋は中程から折れて砕けていたし、川は干上がり川底はひび割れていた。

そこらじゅうに真っ黒な『なにか』が火を纏わり付かせながら立っている。その形からかろうじて樹木だったのであることがわかる。俺達の横にあった自転車はぐにやりと曲がり、熱疲労で所々折れ、もう乗ることはできないだろう。

舗装されたアスファルトは溶けて、黒い粘性の高い『何か』になっている。

大気は熱く、吸った空気が喉と肺を焼く。

空気に触れている肌はちりちりと炙られ、きっとそのうち俺の服は燃え上がるだろう。

ただ立って呼吸しているだけで、どんどん体力が削られていく。

そして。

そんな世界の中に。

マッドサイエンティストがいた。

…場違い感も甚だしい。

何故マッドサイエンティストかを教えよう。

細身で長身。

白衣をきてる。

度のきつそうな、分厚い眼鏡。

白衣が真っ赤。おそらく返り血。

口の端が裂けるかと思うほどに大口を開けての大笑い。

そしてなにより。

右手がドリルだ。

何て言うんだろうか、小学生が想像するようなドリルといえはいいんだろうか。

小説や漫画に出てくるマッドな彼等が人に付けたがるアレである。

いや、自分に付けるような奴は今まで読んだことも聞いたこともなかったが。

とりあえず。

これは勘だが、この現象を起こしたのはあいつらしい。

一歩踏み出す。

息は苦しく、肌は焼け、靴底は溶けてきていたがそれでも前に進めた。

白衣の男まで約50m。

そういえば須藤が横にいない。
今まで全く気付かなかった。しかしそれはあまり重要なことではない。

今やるべきことは一つだけ。あの白衣のそばに近づくこと。

さらに一歩。行ける。走り出す。

一気にスピードを上げる。息をするたびに肺が焼けていく。
なら、呼吸を止める。

白衣との距離が近づく。あと少し。

体に力を込める。あと五歩。

一気に右腕を振りかぶり。

「おっせえんだよ馬鹿野郎!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

思いっきり白衣の男をぶん殴った。

三話・やるべきこと（後書き）

誤字脱字感想お待ちしております。

四話：参加条件

「ふげらっ！！」

白衣の男は変な声を出しながら面白いように吹っ飛んだ。

思いのほか力が入っていたらしい。多少手加減したつもりだったが。

「何をするんだネ！君は！！」

立ち上がって白衣の男がこっちを向いて吠える。なんか変な口調でイラッとする。

何だ。意外と大丈夫そうだ。ならもっと思いつきり殴つとくんだった。

「何だネ何だネ君は。参加者千人弱の中でこんなに早くに殴つたのは君だけだヨ！！」

「いやかましっ！！」

ぐだぐだところちを向いて不満を言う白衣の言葉をぶった切る。

「おっそいんだよお前は！！」

「何が！君に会ったのは初めてだロウ！？何が遅いというんだ！！」

ぐだぐだと、いらん言葉を吐きやがって。

「…お前がこれをやったんだろ。この世界を変えたのはお前だろ？」

「そうだヨ、それが何だっていうんだ？元の世界に戻せとでも言
違うー！！！！」

俺は白衣の言葉をぶった切る。

「待っていたんだよ。」

「…は？」

「俺はこんな、現実ではない非現実が俺のそばにくるのを待ってい
たんだよ！！」

「…」

「五年だ！中学でファンタジーな小説を読んでからずっと、いつか
こんな世界がくるのを待っていた！！わかるか！？五年だぞ？中学
生がもう高校二年だ！夢の中でも、誰かと遊んでいる時でも、好き
な子が隣の席になった時も、寝ても覚めてもこの瞬間を待っていた。
五年。五年間もだ。だから改めて言うぞ。」

息を思いっきり吸う。

「おつつつつつそいんだよ馬鹿野郎！！！！！！」

渾身の力で叫んだ。

のどが痛い。大声の出しすぎで声帯から血が出そうだ。

そう、俺はずっと待っていた。空想の世界に憧れてしまった。
だからその世界に行けることを夢見た。

言っちゃ何だがただ漫然と待っていたわけでもない。須藤の親父に稽古を付けてもらったりして強くなる努力もした。

召喚陣をかいたり、ヤンキー達の喧嘩に飛び込んだりもした。親父に土下座で再婚して義妹を作ってくれと頼んだりもした。

食パンをくわえてわざと遅刻ぎりぎりに走ったことなど数十回もある。月に一度はやってたからな！

だけどそれでは地獄を見たり、骨を折ったり、おもいつきりぶん殴られたりなにもないまま学校に付いたり、何にも非日常はやってこなかった。

五年も待たされたのだ。それはそれはストレスが溜まっていた。一年ほど前から召喚されたらその召喚士をぶん殴ってやろうと決めていた。

それが俺の、非日常での『最初にやること』と決めていた。

「ああ…ナルホド。」

白衣がぼつりともらず。

「君は馬鹿なんだナ。」

「んだと!？」

「怒るなヨ、褒め言葉だヨ。」

そして、白衣の表情が変わった。まるで本物の医者のような、何かを見通すような眼をこちらに向ける。

「君は非日常に憧れている。」

「ああ。」

口調の変わった白衣に間髪入れずに答える。当たり前だ。中高生の一途な想いをなめんな。

「君は叶えたい願いがある。」

「もちろん。」

すでに非日常にいる俺は、一番の願いは叶った。だけでも、ここで終わるのは勿体ない。まだ終わりがたくない。それが願い。

「妄想は好きか？」

「大好きだ。」

そうでなきゃ、早々にこんな夢は諦めている。

それを聞いて、白衣の男は目を細めてじっとこちらを見ていたが、

ふつと顔を崩し。

「君は、本当に馬鹿なんだなあ。」

楽しそうに笑った。

「ならば君にはこのゲームに参加する資格がある！俺の箱庭で遊ぶことを許そう！」

白衣の男がそう言った途端、俺の中で何かが変わった気がする。よくわからないなにか。多分それは参加の許可証みたいなものなのだろう

「細かいルールは遊びながら覚えていけ。優勝賞品は『世界を書き換える力』。勝利条件は『モノリスを奪うこと』。優勝条件は……まだ秘密だ。」

そして白衣は右手をあげる。その手にいつのまにか巨大な銃が握られていた。いたるところから管の出た銃身。馬鹿でかい銃口。なぜか生き物を連想させる銃だった。その銃口を空に向ける。

「さあ、今こそゲームの始まりを宣言しよう！」

「この世界では妄想したことが現実となる！日常を非日常が侵食する世界だ！力がほしいなら想像しろ！それがそのまま君の力だ！！信じる、疑うな！君にはそれができる！！！」

「戦って、勝ち取れ！それでこそ得たものには価値がある！」

白衣が引き金に指をかけ。

———楽しい楽しい舞踏会の始まりだ！———

号砲が響き渡り、あたりは光に包まれた。

四話：参加条件（後書き）

なんだかもう、どうすりゃいいんだと。
プロットは大事だと理解しました。

誤字脱字の指摘、感想お待ちしております。

五話：参加証（前書き）

誤字脱字の指摘、感想を首を長くして待っております。

五話：参加証

目をあけると空が見えた。

右を見ると背の高い草が視界を遮る。斜面で寝ているらしく、下を見ると河が見えた。

左を見ると須藤が俺の腕を枕にして寝ていた。

…なんだこのシチュエーション。

まあとにかく。

俺は河原であおむけに寝ているらしい。

空は少し明るんできている。四時になった時点でまだ周りは真っ暗だったのだから時間がたったことを感じさせた。

携帯を須藤を起こさないように取り出して確認する。

…五時三十分を回ったところだ。

少なくとも一時間くらいはこの体制のままだったのだろう。須藤を腕枕している手の痺れからもそれは予想できた。

…なんでこんな状態なのかは解らないが。

しっかし気持ちよさそうに寝ているもんである。こう、寝てる顔は可愛いと言えなくもないような気がしないでもない。

…どっちだよ。

自分で自分に突っ込みを入れる。それ以上須藤を見ていたり、そのことを考えていたりするとなんだかまずい気がした。何故かはわからない。わからないんだよ。そういうことにしてくれ。

右手で須藤の頭を支えながらゆっくりと腕を引き抜く。

「…うん…」

須藤から声が漏れる。

やばい。本気でかわいいかもしれない。

いや、小さいときは結構一緒に寝たりしたもんだが高校に入ってから、そんなことも一切なくなっていた。

いつのまにか、こんなにも女らしくなってるとは気付かなかった。普段一緒にいることが多いからかもしれないが、いままでこいつに女を感じたことはない。それは断言してもいい。

こいつとの記憶は稽古の時に本気で殴りあった記憶とか、よくわからない喧嘩を須藤が吹っ掛けられて、そのまま何故か俺が巻き込まれたとかそんな色気も何もないものばかりだった。

でもよく考える。

こいつは美形だ。それは認める。

そして高校二年生。親父が酒に酔ったときに言っていた。この時期の女の子の成長は早いと。驚くほどの速さで女の子から、魅力的な女になることは珍しくないと。

確かにこう改めて近くで見えたら、昔はなかった色気みたいなものを感じられる。少し丸みを帯びてきている体つき。きめ細かい肌。普段木刀を振り回しているからか豆のできている、でも、男に比べると細くて小さな手。そして、みずみずしい唇。その唇が開き。

歯ぎしりしやがった。

なんか、一氣にいろんなものが抜け落ちた。あれだけ激しかった心拍数も一氣に落ち着く。そして残ったのは、恥ずかしさだけだった。

悶えましたとも。俺は何を血迷っているんだと。幼馴染だぞ、師匠の娘だぞ、『番長』なんてあだ名のやつだぞ、と。

恥ずかしさが抜けるまで転がり回る。そのうち草についていた朝露と朝の肌寒さのおかげで頭が冷えてきた。

大きくため息をつき、体を起こす。
なんとなく須藤のほうは見れない。見たら何かが俺の中で終わってしまうような気がしたからだ。

手に持っていた携帯をズボンのポケットにしまう。

と、なにかがすでに入っていた。
取り出す。

携帯電話くらいの大きさの黒い箱が出てきた。

…なんだこれ。

俺はこんなものを持っていたような覚えがない。今日の
そして思いだす。

さっき見た、そして体験した夢のような出来事。

地獄に迷い込んだような世界。

現実世界にいたらすぐさま病院に叩き込まれそんなマッドなサイエ
ンティスト（風）な男。

そしてその男が最後に見せた、どこから物理法則を無視して取り出したと思えない巨大な銃。

そしてその中に出てきた勝利条件。彼はこう言った。『勝利条件はモノリスを奪うこと』と。

つまり、この携帯電話みたいな四角い箱が、そのモノリスなんじゃないか？

映画で見たモノリスというものは巨大なものであった。しかしその形、よくわからない材質でできているとは思えない不思議な光沢を放つ黒い外観。それを考えるとこれはモノリスといっても何ら問題はない気がする。

つまりは、俺が非日常に踏み込んだ証なんじゃないか？

体の芯の辺りが熱くなってくる。待ち望んだものが、すぐそこに来ているのだ。これで興奮しないわけがない。このゲーム、参加させてもらおう。もちろん優勝してやる。

白衣の男の言葉を思い出す。

優勝条件は『この世界を書き換える力』

上等。俺の好きなように書き換えさせてもらっ。

勝利条件は『モノリスを奪うこと』
シンプルでいい。大変わかりやすい。

あとは。

…。

…あとは？

あれ？わかってるのはそれだけ？

確かあいつは『妄想が現実となる』って言ってたけど、それは結局
どういうことだ？

うっわ超絶説明不足！わけわからん！ふざけんな！

おもわず頭を抱えて思いつく限りの言葉で白衣の男を頭の中で罵倒してみたが、当たり前だが何も起こらない。

なんだか先行きは不安である。思わずため息が漏れるが、ここで考えていてもちが明かない。

「それは大変きょうこうですね。うへへへへへへへ」

とりあえずなんか幸せそうな顔でにやけている須藤の頭をはたいて起こすことを心に決めた。

五話：参加証（後書き）

「あたっ」

「帰るぞ須藤」

「なに！？めくるめく私の夢のような世界はどこ！？？」

「わかってるじゃん。それは夢だ」

「なんてこった！！起きなければよかった！！！！」

「いいから、露でぬれて服がびしょびしょだ。風邪引くから早く帰るぞ」

「あーあ。犬の黒峰がすごくかわいかったのになあ……」

「……いや、それはどういうことだ」

「そのまんま。黒峰が犬になって。んで、私になついて一生懸命私の顔を舐めてきたんだよ。可愛かったなあ……」

「……帰るぞ」

「ん？でも何でそんな夢見たんだろ？」

「……」

「あ、まてよー。夢の中の黒峰はもつと従順だったぞー！！」

「知るかー！！」

六話：ルールの確認（前書き）

あいだがだいぶ開いてしまいました。

六話：ルールの確認

河原からの帰り道で。

「ところでお前はなんで寝ていたんだ？」

そう須藤に聞いてみたところ。

「何言つてんの。君が突然ふてくされたように寝てしまつから私はつまなくなつて横になつたんだよ。そしたらいつの間にか眠ってしまった。」

そんな答えが返ってきた。

「…お前は地獄に…いや、白衣を着た男とか、見なかったか？」

「何それ。いや、周りにはそんな奴いなかったけど。」

…つまりはこいつはあの白衣が言つてたゲームに参加してないということなのか？

ん？そういえば、俺の持つてたチラシがない。

「チラシはどうなった」

「チラシ？何のこと？」

「…燃えたチラシなんだが。」

「…いや、馬鹿にしてるのかしらないけど、燃えたんでしょ、その

チラシ。じゃ、今は灰になってるんじゃないの。」

なんか違和感がある。確かさっきはポケットから出した時点でチラシが燃えた。それを須藤も見ているはずだ。それをまるで見たこともないように言うというのはおかしい。

そうだ。こいつは『チラシなんか知らない』ようなしゃべり方をしているのだ。

「須藤、質問」

「何でしょう。」

「夢をかなえるチラシ……いや、『俺たちはなんでここにいるのだろうか』」

「それは、黒峰が電話かけてきて、『夜という何が起こるかわからない世界に身を投じてみよう。んで、俺一人だと通報されかねないからお前も来い。』とのたまわれたのでやさしい渚ちゃんは付き合っただけだよん。」

「……そりゃどうも。」

……どういうことだ？俺はそんな話を全くしていない。俺が言いそうなことではあるが、チラシのことに全く触れていないということ、違和感バリバリだ。記憶の改ざんか？

そんな話をしていたら帰りの分かれ道についた。

「それじゃね。また後で。」

「了解、学校で。」

部屋の扉を閉める。思わず笑いが漏れてきた。

…いいねえ。なんとも素晴らしいほどに不思議感があふれてきた。

『参加者にしか関係する記憶が残らない。』なんともファンタジーじゃないか。

ポケットからモノリスを取り出す。どこにも継ぎ目がない完全な長方形。色は黒く金属なのかプラスチックなのかわからない材質。金属でできているにしては軽すぎる気がする。

…ぱつと見は黒い携帯だ。重さもそんなものである。

そつと表面をなでてみた。

モノリスの表面に青い光が走った。

「…え？」

『起動開始。』

モノリスから機械で作られたような音が出た。

青い光が目まぐるしく走る。その光が少しずつゆっくりと収まっていき。

『起動完了。おはようございます。』

そう言って完全に止まった。今は中心部分でうつすらと光が明滅している。

「…なんだ？」

思わず口から言葉が漏れた。

『疑問返答不可。問いが明確ではありません。』

…えっと。どういう意味だ？さっきの俺の『何だ？』という質問に
対しての答えを返したのか？
…ことはだ。質問が意味わからないと言っているのだろうか。
つまり、わかりやすい質問をしろと。

「えー、君は何だ？」

『回答。 名称 モノリス。 機体番号 X - 1 1 0 2 2 4 5。 登録者
黒峰 海里。 勝利条件。』

…成程。 何というか、よくある一（本とかで出てくる）AIみたい
なものか、これ。 いわゆる融通の利かない機械。
だったら。

…まず名前をつけよう。 いろいろ理由はあるが、一番の理由として
は俺の設定資料集一（通称黒歴史ノート）のAIには名前が付いて
いた。

「君の名前を変えることは可能か。」

『肯定。可能です。』

「なら決まった。君の名前はムラクモだ。」

『確認。名称をモノリスからムラクモへ。了解しました。』

「以降、登録者である黒峰海里以外に対する返答は、これを黒峰海里が許可しない限り禁ずる。」

『確認。了解しました。』

「この戦いについてのルールに対する返答は可能か。」

『肯定。可能です。』

「そうか、じゃあまず。」

…そうして俺とムラクモとの対話が始まった。

確認できたことをまとめよう。

この戦いでは、自分の想像した能力をぶつけ合わせて戦う。使える能力は五つ。

そのうち一つはすでに決定している。

能力名は『箱庭』

発動とともに半径100m範囲が現実世界から隔離され、いわゆる異世界となる。

その異世界は現実世界となんら変わりはないが、モノリスを持つていないものは入れず、また、その異世界で起こったことは何も現実世界に影響しない。

また、『箱庭』発動時にその効果範囲にいなかったものは、モノリスの有無にかかわらず、原則その発動を感知できない。

「ん？たとえばその世界で死んだり怪我したりした場合はどうなるんだ？」

『回答。『箱庭』がとけた時点ですべてリセットされます。死んだ場合も同様に、その死がリセットされます。』

「例外はあるのか？」

『肯定。本人がリセットを拒めばそれはそのまま『本人のもの』に限り現実世界に影響します。』

「『本人のもの』の定義とは？」

『回答。その人物が無意識下で自分、もしくは自分のものと認識しているものです。』

「なるほど」

戦いが始まるのは一週間後。

トーナメント形式ではなく、バトルロワイヤル。いつどこで戦いを始めても構わない。一人を数人で倒しても何ら問題はない。

バトルフィールドは指定なし。しかし、先に述べた『箱庭』を使つて、一般人に影響が出ないようにしなければならぬ。

戦いが始まるまでモノリスを奪つてはいけぬ。

この一週間は自由に能力の変更ができる。しかし一週間後、戦いが始まってからは一度決めた能力は固定される。

「えーと、質問。もしもその時点で能力が余っていたら。つまり、三つとか四つしか能力を定義していなかったらどうなる？」

『回答。その場合、戦いが始まった後にも能力を定義すれば、その能力を使うことができます。最高能力数が5ということに変わりはありません。』

「もうひとつ質問。同じような能力の場合、その強弱はどうしたら決まる？」

『回答。同じような能力だった場合、どちらがその能力を信じているかで決まります。』

「つまり、信じているもの強いとか、気合があるほうが勝つとかそういうこと？」

『肯定。その通りです。』

「なるほど。能力に限界は？」

『回答不能。その質問には答えられません。代わりに主催者からの言葉を伝えます。『妄想しろ。それが現実となる』とのことです。』

「えーと、それだけ？」

『肯定。それだけです。そしてそれがすべてです。』

「…そうか。」

勝利条件はモノリスを奪うこと。奪う、とは、自他共にそのモノリスの所有権が移行したと判断した場合である。

その場合、強がりなどで『貸しただけ』と言ったとしても無意識化で奪われたら思っていた場合は勝利条件を満たす。

また、片方に意識がなかった場合、意識がある者の認識が勝利条件を満たしているかの基準となる。

優勝条件は未発表。ただ、『参加者全員を倒す』ことでは優勝ではない。正確な勝利条件は、戦いが進んだら発表する。
参加人数は公表しない。

「聞きたいことは、とりあえずこのくらいか。ありがとう、ムラクモ。」

『疑問。なぜ今私に感謝をしたのですか？』

「…あー。感謝の気持ちが俺の中に芽生えたからだよ。『知りたいことに答えてくれてありがとう』と。」

『…。』

さて、今日はどんな天気かとカーテンを開ける。きれいな青空。澄み渡ったきれいな空。朝焼けとかではなく、日が昇った状態の青い空。

今日は水曜日。

もちろん学校がある日。

時計を見る。

11時。

……。
……。
……。

少し、熱中しすぎていたのかもしれない。

七話：戦闘準備

それからの数日は大変楽しい時間でした。

今までのフラストラーションを発散するかのよういろんな能力を使いまくった。

たとえば漫画に出ていたあんな能力とか、小説に出てきたこんな能力とかそれこそいろいろ試しまくった。

本当に、本当に楽しい時間でした。

非日常の異能力をこんなにも自由に使えるとは思わなかった。

ただ、これも一週間しかないお試し期間だからこそその楽しさ。一週間後までには能力を五つに限定しないといけない。

いや、一つは『箱庭』と決まっているのだから実質四つか。

…残念だ…。

それはさておき。

この数日間、能力をがんがん使ってみたところ、結構いろんなことがわかった。

まず、某ハンター漫画ではないが、条件付けをすると能力の『強さ』が目に見えてアップする。

たとえば、割と最初の段階で『手のひらから火を出す』という能力

を使ってみた。

この能力、手のひらから一メートル範囲くらいに火が噴出した。それでだ。その能力の発動条件に『手のひらに特殊な模様を書く』という条件を付けてみた。

そうした場合、範囲が一気に10メートルくらいに広がった。しかも火力を調整できるようにもなった。

俺が考えるにこれは条件を設定することで使用者が明確にその能力を使うということがイメージできるからではないのだろうか。

人間ってというのは何とも厄介なもので、突然ぽんと渡されたものはそうそう自分勝手に使えないものだ。

だからこそ条件付けをして『自分の力で手に入れた』と思わなければいけないのだろう。

ゲームなどで、そういう条件が付いている魔法などのほうが得てして強い魔法だ、という先入観が植え付けられているのかもしれない。ま、最近は最初っから最強な主人公も結構いるはいるのだが。

能力の強弱に関してはもう一つ気付いたことがある。

んー、何と言えがいいのか。『単一の能力のほうが強い』ということである。

ある小説の中に出てきた黒魔法を使っているうちに気付いたのだが。その小説の中に竜を倒す魔法というのが出てくる。

それを使ってみたのだが、まあ名前にはたがわず大変強い呪文でした。んで、ちよつと気になったので、その竜を倒す魔法だけに見てみた。つまり、『黒魔術』という能力から『竜を倒す魔法』だけを能力にしたのである。

するとさらに強い呪文となったのである。

これはどうしてこうなったのかはイマイチわからない。

可能性としては、単体の魔法にしたほうが強いに決まっている。という考えが俺にあった、という説。

一回の仕様MP量が決まっについて、単体にすることで使える量が変わってくる、という説。

この二つが考えられる。

ちなみにムラクモに聞いてみたところ。

『不可。その問いに答えることができません。』

ときた。

何故かと聞くと。

『回答。その問いに関する答えを持ち得ていません。』

という答えが返ってきた。

だからこの疑問は終了。もしも他のゲーム参加者と話ができるチャンスがあつたら聞いてみるのもいいかもしれない。

それでだ。

俺の能力が決まった。

『箱庭』 『身体能力上昇』 『略奪』

二つは空けておいて、今のところこの三つだ。

『箱庭』は、以前説明した通りの能力である。

ちなみに俺はこの能力に条件を付けた。少しだけめんどくさいのだが、呪文のようなものを言わなければいけない。

その呪文は特に決めてはいないのだが、『十秒以上』で、『作り出す箱庭をイメージした』文でなければいけない。

この条件を付けたのは、ある状況になった時のことを予想してのことなのだが、まあそうそう起こるようなことではないだろう。ただの保険のだ。

そして、次の『身体能力上昇』。

言わずもがな、ただ単純に自分の速さ、強度、精神力その他の引き上げを目的とした単純明快な能力である。

使ってみたところ、自分のやる気、怒りなどの感情の高ぶりに合わせて身体能力が上昇する。

これは恒常的に自分にかかっている状態にした。

ただ、難点がいくつかある。

まず一つに感情によって能力の上下が決まる。ということだ。

やる気。

これは全体の能力が平均的に上がる。

喜び。

やる気よりも能力の上昇が高い。特に速さなどの分野の上昇率が高い。

哀しみ。

これは哀しみの種類にもよる。が、基本的に能力値は軒並み下がる。

リラックスモード。

強度、精神力、回復力などの値が上がる。

怒り。

速さ、力などの攻撃力系の値は跳ねあがるが、精神力、自身の強度などの守備力系の値は驚くほど下がる。体力は上がる。

などなど。

気分には左右されるが、それでも俺は最初っからこの能力は絶対に入れようと決めていた。

だって、怒り、とか、負けられない、とかの気持ちで打ち勝つキャラってかっこいいじゃん。

それを自分で言ったら色々くだいなしのような気もするけど。

そして最後の能力。『略奪』

これが俺の能力のキモだ。

この能力がどんな能力なのかはまあ、予想はつくと思う。字面通りで間違えはない。相手のものを『略奪』する能力だ。

かなり悩んだ結果、この能力を選んだ。使い勝手がよく、それでいてだんだんと強くなる能力。そんな能力が俺は欲しかった。

そして、この能力はそんな俺の欲しかったものをかねそるえるもの

だ。

略奪するものに制限はない。それだけは今言っておこう。

ちなみにこの能力、かなり条件をつけている。

『略奪するものを直接目にする』、『自分の名前を相手に聞かせる』。そして『相手に触った状態』で『「悪いな」という言葉を相手に聞かせる』

他にもいくつか条件は付けているが、この四つが『略奪』が発動する最低条件である。この最低条件を満たし、他の条件もクリアしていくにつれて、さらに深く略奪できるようになっている。その条件数は割と多い。

能力はあと二つ使えるがそこは空席としておこうと思う。いくつか候補はあるのだが、選びきれなかったのだ。

さて、あの日から明日で一週間。準備は万全、覚悟も決まった。五年越しの夢が、いま叶う。

だから、今日はちっちと寝ることにします。

七話：戦闘準備（後書き）

まだ始まってすらいません。

八話：戦闘開始（前書き）

お久しぶりです。

八話：戦闘開始

目が覚めて時計を見ると五時でした。

まだ学校に行くにも早すぎる時間。どんなに頑張っている部活動の朝連でもこんなに早くは起きないだろう。というかまだ日も出ていない。

楽しみだったのは認めよう。とてもとても楽しみだった。

…だからと言って、こんなに早く起きるなんて、俺は子供か…。

時計を置く。改めて横になり、布団をかぶって目をつむる。おやすみなさい。目覚ましが鳴るその時まで、俺は再びの眠りに…

…

…

………眠りにつけるわけがない。

ああ、眠れるわけがない。こんなにもテンションが上がっている。こんなにも今日という日に期待している。そんな俺が布団に入って眠れるわけないじゃないか。

体も完全に覚醒している。いまなら即座にフルマラソンくらい出来そうな気分だ。しないけれども。

仕方ない。俺はため息をついて布団を抜け出す。さて、かなり早いが支度をして、学校に行こう。

もしかしたら、何か起こっているかもしれない。今日は始まりの日なのだから。

予想の一つとしては。

そうだな、どっかの美少女が男数人に囲まれて戦っていて、俺がそれを助ける。ゲーム参加者であったその美少女が、俺に言うんだ。

『君、強いね。私と組んで、優勝目指さない？』

それを聞いて俺は言うんだ。

『やだよ。結局最後は勝敗決めなきゃいけないのになんで組まなきゃいけないんだか』

それを聞いた美少女はむくれながら言うんだ。

『それまでの共同戦線だったらいいじゃない。わからずや』
そういつて、去っていくのだが、俺とそいつはこの後何回も出会うことになるのだった。

そんな感じの出会いがあるといいなあ。さて、朝飯は何にしよう？
そんなことを考えながら学ランに着替えて部屋を出た。

学校に着いたら校門前で気合の入ったヤンキーが男数人に囲まれていた。明らかに剣呑な雰囲気。

…いや、これは求めていない。心の底から求めていない。俺がほしかったのはもつとこう、なんかライトノベルとかであるような、わくわくするような出会いだ。

それなのに、何だこれは。街中で喧嘩に出くわしたのと同じ状態じゃないか。

そんなことを考えていると、男の一人に胸倉を掴まれていたヤンキーと目があつた。そのヤンキーはにやりと笑い。

「よう、やっと来たか。」

あろうことか俺に声をかけてきた。ああ、これで今俺は巻き込まれることが確定した。なんてこつた…。

ヤンキーを囲んでいた男たちが一斉にこちらに向く。うわあ、敵意をもった目だなあ…。俺はそいつと面識も何もないのに。後どうでもいいがみんながみんなこつちを向くと。

「うおりやあ…！」

そんな風にヤンキーから反撃を食らうぞ、と。ヤンキーは胸倉をつかんでいたプリン頭の男1の手を持ち投げ飛ばした。何が起こったのかわかっていないような顔のまま回転する男1。頭が地面に落ちるかもというその前に、ヤンキーが思いっきり腹を蹴飛ばした。

うわあ…。あれは、辛い…。腹をけられた男はいろんなものを口から撒き散らして転がっている。

「てめえ…！」

それを見た金髪、男2がいきり立つ。倒れた男を除いて六人ほどい

たのだが、一斉にヤンキーに向かって飛びかかっていった。しかし、その隙間を縫うようにすると体を滑らしてヤンキーは男達の包囲から抜け出す。特徴のない男3、男4がうずくまる。死角になって見えなかったけど抜け出す時に拳か何かを打ち込んだんだろう。

「わりいな、助かった」

そう言いながらヤンキーはこっちに歩いてきた。

…いやあ、近くで見ると驚くほどにヤンキーだ。逆立った髪は赤に近い茶。短ランにぶつといズボン。右耳に三つ、左耳に五つ、唇に一つのピアス。腰にはジャラジャラとキーチェーンその他をつけている。なんか最近の田舎のヤンキーといった感じた。

「そう思っなら巻き込むなよ。」

俺はそういうが、男は笑いながらこっちの肩をたたく。

「そんなこと言っなよ。無駄に怪我をするのはいやだからな。先手必勝、卑怯上等。勝ったもんが正義。それが喧嘩ってもんだろっよ。」

…まあ、確かにそうだろう。

「それに、お前なら大丈夫だろ。こんくらいのやつに囲まれたって腰巾着クン。」

…ああ、なんかどつかでこいつと絡みがあったらしいな。その呼ばれ方ならきつと須藤関係の何かだろう。思い出したくもない。

「面識があつたのか？俺ら。」

「前に一度。直接は話したことはないけど遠目で見た。イカしてんよな、番長。」

決定。須藤関係に間違いない。

「無視してんじゃねえよお前ら！！」

そんな会話をしていた俺らに男2がキレた。

「ふざけんなよ！俺らが無視するんじゃねえ！！」

そして両手にナイフを取り出し。

「開け！『箱庭』！！！」

そんなことを叫んだ。

世界が変質する。

戦いの場へと。

男から目に見えない何かが広がる。そしてそれは俺たちの周囲を切り取り、別世界へと連れていく。

気付くと周りにはどこかの漫画で見たような荒廃した世界が広がっていた。いうなれば核兵器での全面戦争が起こった世紀末覇者的な世界？

その世界に、俺と、ヤンキーと、男が三人だけ立っていた。箱庭の中に入れるのはゲームの参加者だけ。こいつらもモノリス持

ちつてことだ。

「なんだ、お前も参加者だったのかよ」

ヤンキーが俺に向かってそんなことを言ってきた。

「こっちのセリフだ」

男2が何かをぼそつと言う。その途端にナイフが肥大化、男2の腕と融合していく。何だろう、できそこないのカマキリみたいなイメージ。

他の男達も何かしらの能力を使ったみたいだ。男5は手にどこから出したんだというどでかい銃を取り出す。男6は手に持っていたキールホルダーがどんどん大きくなり、最終的に釘バットになる。男7は手を地面につけ、そこから真つ黒の木刀を引き出した。いや、あれは多分砂鉄の塊とかによる模擬刀と言ったほうが正しいのだろうけど。男8は上半身が肥大化し、服が破れ飛ぶ。なんだろう、アメコミにいそうな奴になった。

「またなんかあれだな」

「そうだな。なんつーかわつかりやすい感じっつーか」

俺の言葉にヤンキーがうんざりした顔で答える。多分俺も似たような顔をしているんだろう。

驚くほどに感じる雑魚キャラ感。こいつらは主人公の敵じゃない。いわゆる引き立て役にしかねないタイプだ。

「んじゃ俺は三人」

「え、俺もなんかやるの？巻き込まれたただけなの？」

「何言つてんだ？別にやんなくてもいいけどあつちはやる気満々みたいだぞ？ちなみにさっきのも合わせてお前は俺の仲間と認識されてると見た。」

…言われなくてもわかっている。男達はこっちをにらみつけている。まあ、能力者同士の肩慣らしにはちょうどいいか。

「わかったよ。ただ指定させてくれ。俺は銃みたいなのを持った奴と刀を持った奴をやらせてくれ。」

「了解。あとは俺の獲物だな」

ヤンキーがそういうと、とたんにヤンキーから陽炎が立ち上る。髪はさらに逆立ち、色は真っ赤に。空気がかき乱され、轟と突風が吹き荒れる。ヤンキーが能力が発動したらしい。そしてヤンキーは楽しそうに笑い。

「さあ、楽しい楽しい喧嘩の始まりだ！！」

そして戦いは始まった。

九話：初戦

最初に動いたのは金髪の男だった。

「無視してんじゃねえって…」

金髪から俺達までの距離は約5m。その距離すら全く問題としないほどに肥大化した両腕。その先にはナイフが変化した巨大な刀。それをゆつくりと上げ。

「言ってんだろぅが!!」

思いつきり振り降ろした。

刀が地面にめり込み、数メートルに渡って亀裂が走る。これは凶悪だ。当たれば一撃で致命傷。それこそミンチになるのだろう。驚異的な破壊力。

…でもまあ。

「当たらなければ問題ない、と」

ヤンキーも俺も、危なげなくよける。スピードが遅く、直線的なのだ。よけることはそう難しくない。それに俺個人としては、『地面を割るような強力な攻撃』というものは正直見慣れている。

「はっはー!!これ当たったら死んじゃうんじゃないか!?!いいね!いいねえ!!普通の喧嘩じゃ味わえない緊張感!!楽しいなあ!!」

横を見るとヤンキーが笑っていた。その言葉通りの本当に楽しそう

な表情で。

「あいつは俺の獲物でいいんだよな！」

「そうだよ。そいつはお前担当。」

金髪が刀となった腕を引く。その影から釘バットを腰だめで構えた男が飛び出してくる。そのまま腰の位置から振り上げ、俺を狙って振り下ろす

前に。俺の前にヤンキーがいた。

男は一瞬驚いた顔をしたが、知ったことかと釘バットが振り下ろされる。

それにヤンキーが拳を思いつき叩きつけた。

…釘バットが折れ飛んだ。

……そんな無茶苦茶な。

「こいつと。あと、あっちのハルクも俺の獲物だったよな。」

「ああ、そうだよ。…どうでもいいが痛くねえのか、今の。」

「何が？」

ヤンキーがあっけらかんと言う。ああ、なるほど、常識から少し外

れてんだな、こいつ。

釘バットを折られた男は少し後ろに下がり、ぶんと折れたバットを振ると折れた釘バットは元通りになった。

それを見てヤンキーが、いいねえ、簡単にやられちゃつまらないとばかりににやりと笑った。

「さあて！かかってこいやあ！！」

ヤンキーから立ち上る陽炎が揺らぎを増す。実際熱とかそういう系の能力者なのだろうこいつは。近くにいるだけでだいぶ熱い。…いるんな意味で。

まあいい。どうせ巻き込まれた喧嘩だ。肩慣らしでもいい。確かにヤンキーの言うとおり、楽しまなきゃ損だろう。

足元にあった石を二つ拾い、軽く投げる。一つは黒木刀にたたき落とされたがもう一つはヤンキーに気を取られていた銃を持った男の頭に軽く当たった。

睨みつけてくる二人。

「お前ら二人は俺が相手だ。」

言いながら構えをとる。半身になって腰を落とす。右手を手刀の形にして顔の前に。左手は腰の位置で軽く握る。

それを見た男が銃を構える。男が黒木刀を斜め下に構える。

「来いよ、雑魚。せめて少しでも俺のためになることを祈ってやるよ。」

「…ふざけんじゃねえぞあああ！！！！」

それを聞いた男達は一気に頭に血が上ったらしい。黒木刀を持った

男が一直線に走りこんでくる。

…狙いどおりである。

さすがに今まで結構な人数との喧嘩に巻き込まれたことはあるとはいえ、飛び道具を使った奴との喧嘩はそうそうない。あえて言うのなら改造ガスガンで撃たれるくらいだ。

その圧倒的に経験が少ない俺は、遠距離からの攻撃というものを何とか少なくしたかった。

だから近距離攻撃しかないであろう黒木刀の男を突っ込ませたのだ。そうすればまあ、同志討ちを恐れてこっちに銃弾を撃ち込んでくることはないだろうと思ったのだが。

「モデルチェンジ
機構変形 遠距離」

男の持っていたどでかい銃が変形を始める。あえて言うなら形状的には機関銃に近いものから、細身で銃身の長いものへと変化する。それをスツとこちらに向けた。

とたんに体中に悪寒が走る。…あれはマズイ。よけなければいけないと頭が考えるよりも先に本能が体を動かす。体をひねり、射線から体をずらす。

その瞬間、顔の横を高速の何かが通り過ぎた。

危なかった。今のは割と危なかった。一瞬でゲームオーバーになるところだった。安堵感により気が緩みそうになるのを引きしめる。すぐ目の前には黒木刀の男。その手に持った黒木刀がうなりをあげて俺に襲いかかる。

銃弾をよけた影響で体勢を崩した俺はそのまま体勢を思いつきり崩して地面に転がりそのまま男から距離をとる。

モデルチェンジ
「機構変形 連射」
ラビットファイア

その声にいやな予感がした。銃を持った男に目を向ける。細身で銃身の長い銃が変形していく。大きな機構を持ち、六本の銃身を持つ。その銃身が回転、交互に使用されることにより熱くなって変形することを防ぐ特徴的な銃。シュワちゃんが使っていたり、某ゾンビゲームで有名になった銃である。

特徴。

すさまじいまでの連射性能を持つ。

——勘弁!!

全力ダツシユする。さすがにあれを発射したらたまったもんじやない。射線とかそういうもんじやないのだ。

弾を打つ反動によるブレと、異常なほどの連射性能が線での攻撃ではなく面の攻撃となる。

つまり非常に避けづらい攻撃となってしまう。

今みたいに射手から離れていると避けながら近づくというのは無謀に近い。こっちは避けるために大きく動かなければいけないのに対し、反動が凄いとはいえ射手は少し射線をずらすだけで弾を当てることができるのだから。

俺は全力で相手に近づく。銃を持ったほうじゃなくて、黒い木刀を持ったほうに。

面でしか攻撃できないということは、それはつまり精密射撃ができないということ。

味方のいる方向には撃てないということだ。

黒木刀に肉薄する。それでもう銃を持っているやつはこっちに簡単に攻撃はできまい。さっきの狙撃銃による攻撃は意表を突かれたが、細かく動けば問題はあるまい。黒木刀の男から離れなければとりあえずは銃の男を気にせず戦える。

つまり黒木刀を倒すことさえ考えてればいい。

そして、俺は木刀相手には腐るほどの喧嘩をしてきた。

須藤ならいざ知らず、そこらへんの素人に負けるほど弱くない自信がある。

突然自分のほうに走ってきた俺を見て黒木刀の男が焦る。それでも必死で右手に持っている黒木刀をふるった。

「遅い。」

須藤に比べるとあまりに遅い。型も何もない素人の振る木刀は予想がつかない分危険なこともあるのだが、それでもその遅さはあまりに致命的過ぎた。

振り下ろしてきた黒木刀を握っている右手に俺の手を添え外に力の向きをそらす。男は自分の振った黒木刀の慣性に引きずられ、体勢を開く。その腹側に滑り込む。

「俺の名前は黒峰海里」

右拳を握る。左手は相手の右手に添えたまま。

「君は俺の能力を使う第一号だ。」

腰をひねる。力をためて。

「悪いな。」

男の鳩尾に拳を突き刺した。

九話：初戦（後書き）

誤字脱字感想お待ちしております。

十話：咀嚼（前書き）

忙しいことはいいことだ。

十話：咀嚼

『略奪』発動

相手に拳を打ち込んだ瞬間に異物が流れ込んできた。そんな感覚。体が跳ねるような拒絶感。思わずうめき声が漏れる。今までに何もなかった場所を、強制的にこじあけられる。

『能力』が暴れる。ここは私のいるべきところではない、と。能力の本当の持ち主のところに戻りたいと駄々をこねる。

体の中から食い破られる。このままだと俺は自壊していくだろう。それがわかる。

だけれども。

いやだからこそ、俺は思う。

舐めるな、と。

俺は略奪者だ。

略奪対象の好きにはさせない。

蹂躪し吸いつくし好きなように使い切り忠誠を誓わせる。

お前は俺のものだ。誰でもなく俺のものとなれ。

暴れまわる『能力』の手足を鎖と鉄枷で縛り付ける。暴れるな。諦めろ。

まるでメスを使って切り刻むように細部までばらす。細かく。僅かまでも。

『能力』を解き明かす。持ち主よりもさらに深く。見せる。診せる。束縛し、解体し、理解する。

そして、異物を吸収する。自分の中に落とし込む。深く、深く。さらに深く。異物が完全に俺と一体化する。すでにそれは異物ではなく、俺の能力となっていた。

能力名『アルケミスト自由自材』

それが俺、黒峰海里が略奪した最初の能力だった。

「起きろ!!」

その言葉で意識を取り戻す。

俺はいつの間にか膝をついていたらしい。目の前にはヤンキーの背中。その右手には絡んできた男の一人が襟元を掴まれて宙づりになっていた。確か、釘バットを持ってた奴だ。今は気道が閉まっているのか苦しそうにもがいているが、ヤンキーは微動だにしない。そしてその釘バットの男がヤンキーに掴まれているために、男達は攻撃ができないでいるようだ。

「悪い、助かった。」

俺はそう言いながら立ち上がる。
頭を振って意識をはっきりさせる。

「どのくらい…」

俺は意識を失ってた。

「20秒くらいだ。血の気が引いたよ。相手を殴ったと思ったら突然倒れたんだからな。なんか見えない攻撃でもされたのかと思っただぜ。」

その割には全く怪我とかもなさそうだからよくわからなかった。とヤンキーは言う。

致命的。

略奪するためにはその時間が必要で、その時間は無防備になる。もししたら慣れてくることで短縮できるものなのかもしれないが、現段階でその20秒という時間は大きな隙となる。

いろいろと考える必要があるな。

俺はそうまとめ、改めて周りを見渡す。

ヤンキーは釘バット含めて二人倒したらしい。立っているのは最初のカマキリと銃使いだけだった。

「で、大丈夫なのか？」

「問題は…なさそうだ。それより右手の男がやばそうぞ。」

「ん？お、マジだ。やばいやばい」

ヤンキーにつりさげられていた男（釘バット）はぐったりして泡を吹いていた。ヤンキーが男を投げ出す。まあ、死んではいないだろう。

「さて、俺はリーダーのあいつを倒すが、銃のほうはお前に任せたまんまでいいんだな？」

ヤンキーが聞いてくる。…もしかして心配しているのか？

「大丈夫だ…な。試したいこともあるし。任せろ」

「任せた」

そして俺らは自分の相手のほうに走りだした。
銃を構えたままの男がトリガーを引く。その銃の形態は突撃銃。アサルトライフル
一分間で何十発という性能の銃から吐き出された弾が俺に向かって打ち出される。

前に。

「練成」

俺は新しい能力を発動した。

十話：咀嚼（後書き）

短い。

誤字脱字感想指摘、なんでもお待ちしております。

幕間1 ヤンキー安藤克己

安藤克己は普通の男である。ある一部分を除いて。

黒峰にヤンキーと認識されていた安藤だが、いうほどアウトローというわけでもない。

煙草を吸う。せいぜいがその程度。あとはバイクなどに憧れて、付き合ってるカップルを見たら思わず嫉み僻みで舌打ちをする。テストが近付くと現実逃避でスライム連鎖消しゲームで八連鎖の壁に挑む。そんな普通の高校生だ。

普通でないところがあるとしたら、喧嘩が大好きだということだろう。

もともと中学生のころにそういう漫画に影響されたということもあるのだろう。高校に入ったと同時にかつあげの現場を見た安藤は、思わずその現場に飛び込んでしまった。『うわ、俺かっこいい』とか思いながら。

すっかりとしたしつけを受け、早熟だった安藤は子ども自体から思いついても喧嘩らしい喧嘩はしたことがなく、ぼっこぼこにされて終わるのだが。

ただ、安藤には才能があった。

一つは体験したことによる学習能力が高いこと。

文字などを使った学習はすさまじく成績が悪いが、一度実際に経験したことは二度と忘れない。安藤が苦手なのは数学。昔は英語も苦手だったのだが、あるときに片言の日本語をしゃべる外人と知り合ってから、発音、聞き取りともにほぼ完璧となった。

それと同じで、体を動かすことで覚えたものは驚くべき速度で上達していく。

もう一つは、喧嘩が好きだということ。

つまりは一種のMであり、Sであるということ。殴り合いによって感じるいろんなものに取りつかれてしまうという病気だったこと。

そしてもう一つ。

何故かはわからないが、喧嘩に関してだけは負けず嫌いだったこと。

この三つが安藤にはあった。

つまりそれは、喧嘩の才能があるということだった。

高校一年で初めての喧嘩をしてから一年。

その短い期間で県内に安藤に喧嘩を吹っ掛けてくるような男はいなくなつた。

安藤は、退屈で、退屈で、退屈だった。

基本的に安藤は自分から喧嘩を売るということはしない。なんかそれだと喧嘩を楽しめなくなりそうだから。

だからいつもの放課後、いつもくる屋上で煙草をくゆらせていた時も、『退屈だ』と、独り言をつぶやいていた。

『そんな貴様に朗報だぜい！カツミン！』

何だよ馬鹿。うるせえよ馬鹿。飛び降りろ馬鹿。

視界に入ってきたのは茶髪の鼻ピアスの男だった。佐々木 昇。なんつーか悪友。喧嘩仲間。

『ひどいなー。いつも退屈だと言ってるカツミンにお土産を持ってきたのに。』

んだよ。エロ本じゃねえだろうな。

『それはカツミンに全部没収されました。あー思い出したらいらついてきた。さっさと返せよ！』

で、なんだ？持ってきたのは。チラシ？

『なんつてこった！この野郎自分から振ってきてガン無視ですよ！死んじまえカツミン！！』

——それは、俺の運命を変えたチラシ。めくるめく戦いへの切符だった。

まあ最初は退屈がまぎればいいなというような感じではあったのだが。

『君の望みは何だい？』

俺の望みは一つだけ。喧嘩ができること。燃え尽きるほどに熱い戦いを。

『了解した。それは確かに君の望みに相応しい。』

そして、戦いの日々が始まる。

久しぶりに喧嘩を売ってきたやつがいた。

数は五人。知ってる顔ばかり。昔叩きのめした奴らだ。

きつとこいつらは能力者だ。そんな気がする。

能力を手に入れたから喧嘩を売ってきたんだろう。

少しだけめんどくさくなる。どんな能力を使われるかはわからないし、初めての能力を使用しての喧嘩だ。

———
なんとか半分に減らせねっかなー。

そんなことを考えていると、視界に影が映った。

知った顔。向こうは知らないだろうが、前ちらつと見たことがある。『腰巾着』『双竜の片割れ』『妄想戦士』『暴走戦士』などなどで呼ばれていた。

なんだそれ。どこの恥ずかしい二つ名だ、という感想を持ったことを思い出した。

あと一つ。結構喧嘩が強いことも思い出した。

巻き込もう。

そう決めた。

そして戦いが始まる。一人をのした所で金髪が『箱庭』を使ってきた。

能力者確定！。

遠慮はいらない。思う存分力を振るおう。

さあ燃える俺の心。全身に溶岩のような血を滾らせる。
そこにあるのはお前の好物。

心が躍る喧嘩の舞台だ。

——目覚める魂——！！

——能力発動——！！『フレイムハート内燃機関』！！！！

さあ……戦いのはじまりだあ……!!

幕間1 ヤンキー安藤克己（後書き）

自分の考える話に何かしらで必ず出てくる男。

誤字脱字の指摘、感想、批評等お待ちしております。

投稿間違い。

ごめんなさい。色々失敗。
投稿に失敗しました。

少しお待ちください。

削除ってできないんだ、これ。

大変申し訳ないんですが、えー。明後日までにはなんとか新しい話を投稿いたします。

ちなみにここに乗っていたのは自分の他の話です。

間違えてこっちに投稿しちゃった。

本当は
『英雄の部隊』
の二話目の話。

興味ある人は読んでみてください。

本当にすいませんでした。

えー、本文が2000字を超えないと編集できないらしいですね、このサイト。

以下字数稼ぎです。

最近キャサリンをやりました。

大変面白かったです。

同性三人で一つの面をクリアするたびに吠えまくってました。

十一話・銃撃（前書き）

短いです。

十一話：銃撃

「練成」

その言葉で自分からあふれる力を感じる。
欲しいものは銃弾を防ぐ盾。
やるべきことは三つ。

あふれる力を周りに浸透させ。

形を変えたい物質を把握し。

その物質のあるべき姿を錯覚させる。

地面に力を流し、成分を理解し、そのいくつかの物質にあるべき姿を説き伏せる。

そして『練成』という言葉で発してからの数瞬後には、俺の手には全身を隠し、弾を流すために多角形で構成された無骨な盾が現れていた。もちろん相手を見るための小さなのぞき窓付きだ。

それを見た銃の男は一瞬驚いた顔をする。先ほどまで仲間が使っていた力を使ったのだ。当たり前だが驚かないはずがない。

その隙が致命傷だ。

俺は盾を目の前に構えたまま全力で走りだす。

このまま体当たりすればそれで相手には致命的な隙が現れるだろう。

そして走り出した俺を見て、男があわてて銃を構える。しかし遅い。

スピードに乗った俺を止められるわけがない！！

銃の形は突撃銃。
アサルトライフル

それを構えて。撃った。

銃の威力を舐めていました。

「おおおおおおおおお！！！！！！！！！！」

ハンマーで殴られたような衝撃が盾から伝わってくる。両手で持ち手をつかみ、必死で耐えるがまあ、もつけないよね。

最終的に盾の斜め上に当たった衝撃で盾が手から離れ、さらなる銃弾の衝撃で盾が回転し、側頭部に持ち手がぶつかり、吹っ飛ばされた。

当たり所が悪かったのかよかったのか横に転がる。勢いが完全に殺されたことは最悪だったが、それによって射軸から外れたことは最

高に運が良かった。

近くに転がってきた盾を急いで拾い、構える。

『れんしえい』

噛んだ。思いのほか焦っている。

しかし問題なく発動してくれた。盾を補強、自分の周辺を覆えるように、そして銃弾の衝撃を受け流せるように変形させる。円錐を縦に切って半分にし、その先端部が相手に向かっていているような形になった。

さらに盾の下部から地面に突き刺さる形でいくつかの杭を練成する。これで盾が動かなくなる。

その練成が終わった直後に銃弾が襲ってきた。

盾に弾が当たる爆音が響く。

後ろを見ると周りの地面が細かく決れていくのが見えた。

しかし盾：すでにこれは塹壕というのが正しいかもしれない。それは、びくともしない。

これなら耐えられる。あとは銃撃が止まった時にどうするか考えなきゃいかん。盾はマズイし、さて、どうするか…。

まあ、無難なところでは銃弾が止まったらすぐに飛び出し、機動力で弾を避け続けるって手かなあ…。それもシャレにならない話だなあ。

と、塹壕を銃弾がたたき音が止まった。

なんだ？諦めたのか？なら今しかない。考える前に飛び出してしま。

モデルチェンジ
「機構変形 連射」
ラビットファイア

そんな声が聞こえた。

飛び出しかけた体を必死で塹壕の中に戻す。

布を引き裂くような連続的な射撃音と共に先ほどに倍する銃弾が襲ってきた。

後ろを振り向くと。

うん、見なきゃよかった。

…これでどうしろって言うんだ…。

十一話：銃撃（後書き）

だいぶ遅くなりました。忙しかったんです（言い訳）！！

読んでいただきありがとうございます。

誤字脱字の指摘、そのほかの指摘、感想等お待ちしております。

十二話・用意

とはいえ、このままにしていっても何も変わらない。

下手をするときじりじりと近づいてこられて銃弾を叩き込まれるのがオチだろう。動く必要がある。

ただ、銃弾が雨あられと降り注いでいる状態ではあるが。

さて、どうするか、だ。

今いるここはグラウンド。遮蔽物は何もない。

穴を掘っていくというのはどうだろう。そうすればここにいると見せかけての奇襲ができるかもしれない。

…いや、待て。駄目だ。練成をしたとしても、その練成したものをどうするかというものがある。

この能力は質量保全の法則に則っているらしい。ということは多少なりとも穴を掘ったことで練成物が出てくるわけで、その量が多くなった場合、銃野郎にばれる恐れがある。

それに地中からじゃどこにいるのかわかんねえしな！。

つまりこの案は却下である。

では他には。

今の銃撃を止めている塹壕を少しづつ動かして近づく。

却下。これも移動されたら困る。というか俺ならゆっくりと近づいてくるのに合わせてゆっくりと打ちながら下がる。

塹壕から飛び出て気合いで避け続ける。

却下。出来るわけがない。

ヤンキーが今戦っているやつを倒すのを待つ。

…これが一番現実的かなあ…。正直言つて。

それでも倒せるかは微妙なところだけれども。飛び道具って、怖いな本当に。ここがグラウンドじゃなければなあ。もうちょっと遮蔽物があればまだなんとかなるのだが…。

…あ、そうか。作ればいいんだ。

『練成』

銃撃が止む。

塹壕から出て後ろを向く。

そこには大量の石柱が乱立していた。

…やりすぎたかもしれない。

太さは大体国民的タヌキ型ロボットアニメの空き地に転がってた柱くらい。高さは、えー、普通の建物の2階くらいはあるのか？柱の根元の周りは練成の影響か、少し挟れている。

それが大体1、2メートルくらいの間隔で立っているのだ。
…まるで石の森が出来たみたいな光景だった。

もちろん銃撃をしてきた男は見えない。そうでなきゃ銃撃が止むこともないだろう。これで銃撃は防げた。やってみるもんだな。

さて。

首を回す。こきり、と音がする。準備は整った。

反撃開始だ。覚悟しろ。

十二話・用意（後書き）

久しぶりにこっちを見てみたらお気に入り登録をしていただいている方がいらっしました。

…何だろう、ここ数年でなかなかなかった嬉しさを感じます。
具体的には普段飲まない酒でお祝いするくらいに。

このような拙い文章を読んでいただきありがとうございます。
更新も遅く、なかなか先の見えない話ではありますが、見捨てずにお付き合いいただければ幸いです。

読んでくださる方がいるからこそその文章です。
読んでくださった全ての方に無上の感謝を。

誤字脱字の指摘、感想、お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1736n/>

箱庭の遊び方

2011年10月7日17時06分発行